

中村武羅夫

徳富蘇峰氏

德富蘇峰氏

午後の二時頃であつた。新聞社で其時刻は忙しい最中である。刺を通じて面会を求めると、通されたのは二階の応接室である。二十分も其所に待たされた。新聞社の応接室又は何所でもあるが、年々一月一日の附録に刷つた絵を、額にしたり、壁に直張りにしてある。文句は忘れたが、何んでも確か教訓めいた徳富淇水氏筆の額が掛けてあつた。そして白紙に十分以上の長談を禁ずとか、何とかいう、筆太々と書いた掲示がしてある。

國民新聞は蘇峰氏の主宰する新聞紙である。足一度同新聞社に入り行って見て、倩々感ぜられるのは「蘇峰式」と云うことである。國民新聞社は専制君主的に蘇峰の主宰する所だけあって、蘇峰氏の主義主張が、具体的に如何にも能く表われて居る。事務室に行っても、応接室を見ても、何れの室にも蘇峰臭味が充満して居る。

などと待つ間を、那樣ことに耽つて居る中に、旋て人いって来られたのは蘇峰氏である。質素な洋服で、脊の高い肉付のでっぷりとした、見た所如何にも立派な、そして、温厚な紳士である。蘇峰に非ずして阿呆なりとは、

口の悪い誰やらの憎まれ口であるが、人物を見た所決して阿呆ではない。蘇峰氏の名と地位に背かざる重みと、貫目とが人物に備って居る。些つと見は、温厚篤実な君子と云った風格を具えて居る。広い額、高い鼻、切れの好い目、半白の頭、同じく半白の口髯、極めて落付いた、悠々迫らない其態度、遠がは王侯貴人の前にも出ずる人だけあって、人物の拳止動作が決して卑しくない。犯し難い威厳も備って居る。

余は蘇峰氏を見て、外見的人格の人であると思った。先ず相對して腰を下す、テエブルの上に両肘突いて、

対手を凝つと見据えたまま、決して瞳を動かさず、極めて静かな、礼に適った、然し、己れを低くしない言葉を以って話される。悠々として決して迫らない。落付いたものだ。外見は如何にも立派な人物であるが、然しそれは表面だけで蘇峰氏の眼光には、何所となく底冷めたい影がある。悪ごすい、老獪な光りがある。人の懐き慕う優しい所、温かい所が見えぬ。蘇峰氏は人情を以て動く人ではない。規律を以て動く人である。否人情を解さぬ人だ。血のない人、涙のない人である。人物が冷かなばかりでなく、表面君子の風を装うて、内心中々抜け目の

ない人である。自己の名誉、地位、或は利慾の爲めには、敢て如何なる犠牲をも厭わぬと云つたような、冷酷な所ろがある。

蘇峰は人格の人ではない。其國民新聞の日曜講壇に於て、余は蘇峰氏より屢々偉大なる教訓の声を聞くが、蘇峰氏の人格として何所に人を教え導くの資格がある。余は斯る人物に依りて教訓の声を聞くを欲しない。他人の犠牲となり得る人の目より、犠牲の徳を教えらるれば、吾等は服することも出来るが、他人を犠牲に供してまで自己の満足を得んとする蘇峰氏の口よりして犠牲の徳を

聞かせられた所で、吾輩はそれに服することは出来ない。説く其人に向つて、冷笑と嘲罵を送るのみだ。

美わしき人格の人に依りて、教訓の声を聞けば、吾等
は其教訓に依りて、偉大なる感化を受くるも、蘇峰氏の
如き人に依りて、人間の道を聞くも、却つて嫌悪と反悪
の念を持つのみである。

蘇峰氏は、己れを偽り、人を欺くに巧みな人である。
眞実の自己と、人前を飾る自己とは、全く異つて居る、
古猫と云つた形だ。二つの自己を持ち得る人間ほど、墮
落した、そして憎む可く、卑しむ可く、擯斥す可き人間

はない。その落付いた態度、物静かな、而して丁寧な言葉の中には、他人を冷笑するような、冷たい所がある。

蘇峰氏には、剛直にして人に屈せず、何物の前に出ずるも、一貫したる自己を曲げないと云う、男らしい、そして、尊む可き所がない。権勢の前には己れの腰を屈し、阿諛を送って毫も耻としない人である。吾等に対して其堂々たるの風格は権勢の前に媚ぶるの阿諛と変るのだ。

余は蘇峰氏の如き、自己を二つに見せ得る人は嫌いである。其人を教えるが如き、丁寧に、而して、極めて静かな物言い、何となく其心の底まで見え透くような気が

して、実に堪らなく厭やな気がした。今少し率直に磊落になり得られないものか。

余は蘇峰氏の人物を見て、何となく老獪なる古猫、油断して相接しられないような気がした。

日本文学電子図書館

現代文士廿八人

著 者：中村武羅夫

制作者：宮澤一郎

出版社：日高有倫堂

明治42年7月10日 印刷

明治42年7月16日 発行

日本文学電子図書館